

第4章

特別支援学校でのボランティア活用の事例

1 通常学級支援籍の後補充、授業の補助（越谷西養護学校）

1 ボランティアの活動について

(1) はじめに

越谷西養護学校では、通常学級支援籍の後補充（あとほじゅう；通常学級支援籍を行う際に担任が児童生徒に引率して、居住地の小中学校へ行った時に、担任が抜けたクラスに教員の補助として活動する）や、特別支援学校の通常の授業の補助としてボランティアが入っている。

活動総回数は139回で、そのうち後補充は8回、授業の補助は131回である。活動人数は40名で、そのうち大学生が34名である。

ボランティアの募集は、これまでに養成講座を修了した方への呼びかけである。

活動にあたっての留意点としては、以下の4つが挙げられる。

- ①児童生徒の実態や関わり方や支援の仕方について、担任から事前に説明する。
- ②分からぬことやできないことは遠慮なく担任に伝えるようお願いする。
- ③担任との行き違いが生じた場合は、問題が小さいうちに校長から説明をする。
- ④アンケートの実施等、時間を見てボランティアと意見交換をする。

(2) 主な活動内容

	活動内容	活動内容の詳細
1	通常学級支援籍後補充	児童の支援籍学習で担任が引率しているクラスや授業に入り、児童の介助。
2	小学部の授業補助1	校外への散歩の時に引率の補助。
3	小学部の授業補助2	登下校、着替えなどの日常生活学習、授業、給食などで児童の介助。
4	行事補助	運動会予行で、児童の移動の介助。

(3) ボランティアの感想・意見

- ・先生方の熱意とチームワークの良さ、子どもたちの純真さに学ぶことが多く、心が温かくなる。
- ・毎回、自分自身の経験や知識の不足さを実感している。しかし、行く度に児童の可愛さを感じ、こっちの方面を目指して頑張りたいとモチベーションが上がるのでこれからも続けていきたいと思っている。
- ・お手伝いをしながら、学びにも結びつく活動であり、時間の許す中で「意欲的に参加したい」という気持ちが膨らんでいる。
- ・学校関係者以外にもボランティアを求めていることで開放感が増し、学校を知る機会が増えることから、学校に対する信頼が大きくなることを確信した。
- ・毎回担当するクラスの担任の先生がどのようなことをすれば良いのかを説明してくれるので、動きやすかった。
- ・私自身の興味や関心を向ける範囲が狭いということもあると思うが、「ボランティア」という活動があるということを知らないできた。この活動を知ることによって、参加を希望される方が増えるのではないかと思う。

(4) 成果

- ・支援籍の後補充では、担任が学校不在の間の介助があったので、安全に授業をスムーズに行うことができた。
- ・小学部授業補助では、介助があったので安全に授業が行え、担任の目もいつも以上に一人一人にじっくりと向けることができた。
- ・行事では、教員が係をやっているクラスの児童の移動介助をしてもらい、全体の進行をスムーズに行えた。

(5) 課題

- ・ボランティアの調整が困難である。急にボランティアに来て欲しい時には調整ができないこともあった。また、突然のキャンセルもあり、ボランティアには迷惑をかけたこと也有った。
- ・ボランティアに対して賛否両論の意見がある。ボランティアの活動の様子を保護者に知らせていくことが必要である。
- ・ボランティアに感謝の意を表す場がない。

2 ボランティアの活動

【実際の活動の様子】

越谷西養護学校では、小学部の授業の中でボランティアに補助をお願いしている。児童が登校する前に、担任からその日の活動内容を聞き、担当する児童について、どの場面で、どのような支援をするかを確認して実施している。

ボランティアの活動について、担当者からは、「児童を動かしてしまうのではなく、児童から活動するのを待ってくれているのでありがたい。」「児童に指示をするときは、言葉による指示だけでなく、児童が分かりやすい方法(具体物を見せる、写真カードを見せる等)で伝えてください」と等、活動の様子が伝えられている。



ボランティアさん

着替えの介助



児童に授業に注目させる

ボランティアさん

給食を小分けして食べる児童の介助

ボランティアからは、「市内の小学校の学級と少しの時間でも、共に学べる(支援籍のような)場面や機会が増えていくといいなと思った。そして、特別支援学校と小学校がもっともっと近くなる教育制度ができたらいいなと思った。」という感想が寄せられている。

2 通常学級支援籍の後補充、授業の補助（毛呂山養護学校）

1 ボランティアの活動について

(1) はじめに

毛呂山養護学校では、通常学級支援籍の後補充（通常学級支援籍を行う際に担任が児童生徒に引率して、居住地の小中学校へ行った時に、担任が抜けたクラスに教員の補助として活動する）や、特別支援学校の行事の補助としてボランティアが入っている。

活動総回数は10回で、そのうち後補充は9回、行事の補助は1回である。活動人数は3名であった。

ボランティアの募集は、これまでに研修を修了した方への呼びかけである。

活動にあたっての留意点としては、以下の2つが挙げられる。

- ①授業介助では、事前に活動内容等を電話で伝え、詳細は当日担任が説明する。
- ②行事については、担当者当日の事前打ち合わせで活動内容を詳しく伝える。

(2) 主な活動内容

	活動内容	活動内容の詳細
1	通常学級支援籍後補充	児童の支援籍学習で担任が引率しているクラスや授業に入り、児童の介助。
2	行事補助	文化祭では、小学部低学年担当の企画コーナーで、参加する子どもたちの介助。

(3) ボランティアからの意見・感想

- ・仕事をしているので、ボランティアの日が早めに分かると調整しやすい。
- ・いつも同じクラスに入れると、子どものことが理解でき、関わり方が分かりやすくなる。
- ・いろいろな行事に参加させて欲しい。

(4) 成果

- ・支援籍学習の後補充では、ボランティアの介助があったので、安全面の確保ができた。
- ・行事では、遊具で遊ぶ子どもたちの介助をしていただき、安全かつスムーズに運営できた。

(5) 課題

- ・支援籍学習の後補充では、児童の介助をしていただき助かったが、引率で抜けた教員の役割を任せることはできないので、本来の授業の形にすることは難しかった。

2 ボランティアの活動

【実際の活動の様子】

毛呂山養護学校では、通常学級支援籍の後補充ということで、ボランティアに授業での介助をお願いしている。事前に活動内容を担当から伝えているが、具体的な内容については、当日担任から説明を行っている。

この事例では、給食から午後の授業にかけて、ボランティアの依頼をしている。活動内容としては、給食の介助、遊びの学習での介助、着替え等の介助、下校での介助となっている。



給食準備の介助



一緒に給食を食べる



給食の片づけ（食器を載せたワゴンを運ぶ介助）



遊びの時間での介助（遊具を担当）



着替えの介助（衣服の裏表）

3 通常学級支援籍の支援籍校での支援（狭山養護学校）

1 ボランティアの活動について

(1) はじめに

狭山養護学校では、支援籍の後補充（通常学級支援籍を行う際に担任が児童生徒を引率して、居住地の小中学校へ行った時に、担任が抜けたクラスに教員の補助として活動する）、通常学級支援籍の支援籍校での支援や、特別支援学校の行事の補助としてボランティアが入っている。

活動総回数は30回で、そのうち後補充は19回、支援籍校での支援は4回、行事の補助等は7回である。今年度登録人数は22名で、活動人数は12名であった。

ボランティアの募集は、スキルアップ研修を修了した方への呼びかけである。

活動にあたっての留意点としては、以下の4つが挙げられる。

- ①社会福祉協議会のボランティア保険に加入する。
- ②これまでのボランティア養成講座で体験したクラスになるべく配属し、担任と顔見知りの関係を作る。児童生徒の対応については、隨時担任が伝える。
- ③PTA行事の支援については、担当する児童生徒について具体的な留意事項をまとめたものを用意し、事前に保護者からボランティアに説明をする。
- ④ボランティアからの全般的な質問は、コーディネーターが受ける。

(2) 主な活動内容

	活動内容	活動内容の詳細
1	通常学級支援籍後補充	児童生徒が支援籍学習に出たとき、引率の担任が担当する授業に入り、児童生徒の介助。
2	支援籍校での支援	支援籍校で授業に参加する児童の介助。
3	小学部授業介助	校外への散歩のとき、引率の補助。
4	行事での介助	PTA行事で、保護者が役員をしている児童生徒の介助。
5	行事での介助	文化祭の予行練習・当日、児童生徒が舞台鑑賞をしているときの介助やお店を担当する生徒の介助。

(3) ボランティアからの意見・感想

- ・参加の動機は単純に様子が知りたかったということだが、とても奥が深いことを実感した。自分なりに考えながら参加していきたい。
- ・仕事をしているので、ボランティアの日が早めに分かると調整しやすい。
- ・もっとたくさん的人が学校のことを知り、交流できたらよい。

(4) 成果

- ・後補充ではボランティアが入り、子どもたちを見守る目を確保できた。
- ・支援籍校の支援でボランティアが介助に入ることで細かいところまで目が行き届いた。
- ・数年間の積み重ねの中で、この学部なら誰という信頼関係がてきた。
- ・行事では、教員が係で抜けた所に入つてもらい安全で充実した運営ができた。

(5) 課題

- ・ボランティアに入つてもらうことについて、校内の共通理解を図る。
- ・ボランティアバンクの利用の仕方の検討をする。
- ・児童生徒への介助の仕方等、スキルアップを図っていくようとする。
- ・社協との役割分担や学校で養成したボランティアを各市で活かす方策の検討。

2 ボランティアの活動

【実際の活動の様子】



給食の介助



掃除の介助（机運び）

狹山養護学校では、通常学級支援籍における支援籍校での支援ということで、ボランティアに小学校で授業を受けている児童の支援をお願いしている。

この事例では、給食から午後の授業にかけて、ボランティアの依頼をしている。活動内容としては、給食の支援、掃除の支援、音楽での支援等となっている。

ボランティアの方には、養成講座参加時から、この児童のいるクラスに入つてもらい、児童の様子を知つもらつていた。この日は、支援籍学習の流れを知つもらうとともに、特別支援学校の児童が授業に参加する上での支援の仕方について確認をした。給食や校舎内での移動の介助の仕方、授業の中で参加できそうなるところの確認である。

2月は、ボランティアとコーディ

ネーターで引率を行い、児童への支援をボランティアが、相手校の児童や先生との関係作りをコーディネーターが行つた。支援を行つたボランティアからは、老人介護の仕事をしているが、特別支援学校の子どもたちや先生方の指導する姿から学ぶことが多く、今後もお手伝いさせて欲しいという感想が寄せられている。



音楽の授業での介助

担当者からは、支援籍児童のことを知つているボランティアが介助を担当してくれたので、心強かつたという話があつた。通常学級支援籍における支援籍校で



帰りの会での介助

の支援は事例としては少ないが、狹山養護学校では、この事例の他に、もう1事例同様の形で実施している。

4 授業の補助（春日部養護学校）

1 ボランティアの活動について

（1）はじめに

春日部養護学校では、特別支援学校の授業の補助としてボランティアが入っている。ボランティアは、34名で、そのうち大学生が30名である。大学生については、将来教師になることを目指している方を対象としており、教育現場を知る機会の提供という側面もある。

活動総回数は321回。授業の補助は312回、行事の補助は9回である。

ボランティアの募集は、年度当初に、校長が大学に依頼し、ボランティア募集についての説明をするとともに、ポスターの掲示の依頼をしている。また、介護体験や教育実習の学生にも説明を行っている。

活動にあたっての留意点としては、以下の3つが挙げられる。

- ①学校概要について説明をする。
- ②ボランティア体験にあたっての配慮事項等について説明をする。
- ③体験する日時の決定、服装、持ち物等について説明をする。

（2）主な活動内容

	活動内容	活動内容の詳細
1	授業の介助	登校指導、朝の会、授業全般、給食、帰りの会、下校指導での介助。
2	行事の介助	運動会、文化祭での介助。

（3）ボランティアからの意見・感想

- ・実際に特別支援学校でボランティアをするようになり、今まで学校で学んでいたことを現場で見聞きすることが多々あり、ボランティアでの経験が学校の勉強のやる気を向上させるきっかけとなった。また、子どもたちとの触れ合いを通して、特別支援学校の先生になりたいという気持ちが強くなった。毎週一回ではあるが、毎回多くのことが学べ、新鮮な体験となっている。
- ・ボランティアをするまで、障害のある児童と触れ合うことがなかったので、最初はどうして良いか分らず戸惑うことも多かったが、先生方や児童に助けてもらい、少しずつ心を開いて接していくようになった。ボランティアすることで多くのことを学び、とても実りのある経験になった。
- ・私はこれまで家族として、兄弟として、友人として多くの障害を持つ方々と関わりをもってきた。ボランティアでは、それらと違う「教師としての関わり方」を少しではあるが経験できたように思う。子どもたちの成長の一つ一つがとても輝かしく嬉しくもある一方で、週に1日しか来られないもどかしさを感じた。2年間のボランティア経験を通して、特別支援学校教員のやりがいや楽しさをあらためて感じることができた。私のつたない介助に対し「○○さんなら安心」と言ってくれた先生方の言葉が、免許が取れずに夢を諦めかけていたこともあ

った私にとって大きな支えや自信となった。来年度から教員として教壇に立つが、必ずこの場所へ戻ってきたいと思う。

- ・学校全体の温かさ、先生や生徒さんたちの温かい歓迎を受け、楽しく過ごすことができた。

(4) 成果

- ・学校としては、手厚い指導ができた。
 - ・大学生のボランティアには、教師になるための力をつけるのに役立つ機会を提供できた。
 - ・教員が少ないとき等、安全面の確保が図られて良かった。

(5) 課題

- ・教員は児童生徒下校後に会議があるため、ボランティアの方と一日を振り返っての話が充分にできなかつたこと。
 - ・直接的支援を行っていただく場合の配慮点等の伝え方の確認について。
 - ・守秘義務に関する事項の確認について。
 - ・各曜日に均等にボランティアをしてもらえるようにはなかなかならないこと。

2 ボランティアの活動

【実際の活動の様子】

春日部養護学校では、ボランティアに朝の登校から、下校までの一日の全てに関わって介助をお願いしている。

この事例は、ボランティアが小学部、中学部の授業に入った様子である。介助の内容は、ボランティアの入るクラスや授業によってさまざまだが、児童生徒と一緒に授業に参加し、子どもたちの活動の介助をしていただいている。



中学部の体育での介助（準備体操） (校庭のランニング)



— 10 —



ボランティア募集の ポスター



ボランティアさん



118 - 119

5 授業の補助（宮代養護学校）

1 ボランティアの活動について

（1）はじめに

宮代養護学校では、小学部、中学部、高等部の通常の授業や行事の補助としてボランティアが入っている。

活動総回数は36回で、そのうち小学部が13回、中学部が16回、高等部が3回、行事が4回である。活動人数は12名で、学校ボランティア講座の修了者である。

ボランティアの募集は、これまでにボランティア養成講座を修了した方や地域大学生への呼びかけである。

活動にあたっての留意点としては、以下の3つが挙げられる。

- ①児童生徒の具体的な留意事項と活動内容については担任が説明し、その後は必要に応じて説明をする。
- ②必ず、担任の指示のもとで活動をする。特別に健康安全部に配慮が必要な児童生徒とは活動しない。
- ③給食の準備、スクールバスへの乗車は行わない。

（2）主な活動内容

	活動内容	活動内容の詳細
1	高等部プール更衣 マラソン大会練習介助	プールの際の排泄と更衣の介助。マラソン練習の際の伴走と声かけ。
2	中学部授業介助(校外活動介助)	校外学習の際の移動(車椅子)とトイレの介助。
3	中学部体育(サークルトレーニング)指導介助	サークルトレーニングの指導の補助、補装具の着脱と教材の片付け作業。
4	小学部授業、トイレ、給食介助	教員出張時の補充として授業での介助、トイレ、給食の介助。
5	行事の補助	駐車場係として来校者の誘導をしてもらう。

（3）ボランティアの感想・意見

- ・初めのうちは驚きの連続だったが、3回目くらいからは慣ってきた。
- ・子どもたちが、自分の名前を覚えてくれて、楽しい時間を過ごせた。
- ・ボランティアサークルのメンバーは車椅子操作に慣れているので、学校ボランティアもすぐにできると感じた。
- ・養護学校があることは知っていたが、どのような子が、どのような生活をしているのか知らなかった。ボランティアを通じて養護学校を知ることができた。
- ・宮代養護学校には、生徒がたくさんいて、先生たちが一人一人に応じた形で関わっているのが良く分かった。
- ・ボランティアのPRが行き届いていないと思う。やりたいと思っている人は、たくさんいると思うので、もっとPRした方が良いと思う。

(4) 成果

- ・授業に関する準備、片付け等でスムーズに授業が行えた。
- ・安全面の確保ができた。
- ・移動時の安全確保と時間の効率化ができ、現地での活動が充実した。
- ・児童生徒が担任以外の大人と接する良い機会となった。

(5) 課題

- ・事前の打ち合わせ時間が確保できない。
- ・継続した授業に入っていたらしく場合、同じボランティアの方の確保が難しい。
- ・ボランティアの方に、どこまでやつていただいているのか。やってもらつては困ること等、事前に確認し、校内の共通理解を図る。

2 ボランティアの活動

【実際の活動の様子】

宮代養護学校では、授業の中でボランティアに介助をお願いしている。この事例は、中学部の体育、サーキットトレーニングでの介助の様子である。サーキットトレーニングは、多くの教材を使用するため、事前事後に教材の出し入れがあり、その準備と片付けをボランティアにお願いしている。

授業では、車椅子の乗せ降ろしや補装靴などの着脱の介助、歩行時に足を支えるなどの運動動作の介助などを行ってもらっている。



マット運動での介助



平均台での介助

ち時間が短縮され、運動量が確保できた。」「体格の大きな生徒の支援をすることが多いので、安全面に十分配慮しながら運動に取り組めた。」「多くのボランティアと関わることで、生徒の社会性が身に付くことにもつながった。」との感想が寄せられた。



授業で使った教材の片付け



授業の話を聞く

ボランティアがこの授業に入ることに対し、担当者からは、「サーキットトレーニングは、個人種目であり、生徒一人一人に応じた支援が必要になるため、ボランティアにお手伝いいただくことで、生徒の待

6 考察

1 支援籍の後補充

支援籍学習の後補充として、ボランティアを活用している特別支援学校は7校であるが、実際には支援籍の後補充だけではなく他の授業でも活用している。支援籍の後補充で活用する場合は、特定の授業や午前、午後といった形での活用が多いようである。

2 支援籍校での支援

通常学級支援籍における支援籍校での支援として、ボランティアを活用している特別支援学校は2校である。事例が少ないので、まだ関係者間の共通理解を含め、体制の整備が進んでいないことや、ボランティア自身の都合や児童生徒との相性の問題などがあるためと考えられる。

3 授業の補助

特別支援学校において様々な場面でボランティアを活用している例は、数例見られる。ボランティアの活用人数が年間延べ数百人といった特別支援学校は例外的だが、数人のボランティアを活用しているという例は、珍しくなくなってきた。

事例では一日の授業等の全てに入っている例と、特定の授業に入っている例を挙げている。学校全体を支援することから考えれば、ボランティアの活用は支援籍も含めて、学校全体から考えていくことも大切であり、この2つの事例は、今後の特別支援学校におけるボランティアの活用の在り方を考える上で参考になる事例である。



あとがき

近年ボランティアという言葉は、私たちの日常生活の中に定着してきていて、珍しい言葉ではなくなっています。大きな災害が起こると、全国から多くのボランティアが被災地に駆けつけるといった光景は当たり前のようにになってきています。

学校においてボランティアというと、中学校や高等学校における部活動の指導者や小学校での登下校のパトロールなどが頭に浮かびます。では、特別支援教育におけるボランティアはどんなものかというと、なかなかイメージしにくいのが現状ではないでしょうか。

平成19年4月には、学校教育法の一部改正によって、障害のある児童生徒一人一人に対して、適切な指導、支援を行うことが規定されましたが、その実現に向けての課題として人材の確保が挙げられています。

文部科学省が全都道府県教育委員会に対して、平成15年から委嘱した「特別支援教育体制推進事業」の中でも、特別支援教育を支える人材として、地域のボランティアの活用について言及しており、平成19年3月には、全国の先行事例を集めた事例集を作成しています。

今回作成した事例集は、2つの事業をまとめたもので、一つは熊谷市、久喜市をモデル市として市内の幼稚園、小学校、中学校に在籍する発達障害を含む障害のある子どもたちに対するボランティアの活用、もう一つは特別支援学校におけるボランティアの活用です。

特別支援教育におけるボランティアの活用は、まだスタートしたばかりということもあり、今回の事例集の作成にあたっては、他市町村や他特別支援学校での参考資料となるよう、より実践的な内容となるよう心掛けました。関係の皆様が、特別支援教育におけるボランティアの活用の際に、本事例集を参考にしていただければ幸いです。

結びに、本事例集の作成に御協力いただいた、熊谷市教育委員会、久喜市教育委員会の関係者の皆様、事例をお寄せいただいた県立特別支援学校の関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

平成21年3月

埼玉県教育局県立学校部特別支援教育課

本書は、次の者が担当しました。

黒澤 一幸	(県立学校部特別支援教育課 課長)
荒井 宏昌	(県立学校部特別支援教育課 主幹兼主任指導主事)
小谷野幸也	(県立学校部特別支援教育課 主幹)
鈴木 克俊	(県立学校部特別支援教育課 主任指導主事)
小林 直紀	(県立学校部特別支援教育課 指導主事)